SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中華人民共和国初期における「社会教育」と大衆運動：天津市の事例から (重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007058

中華人民共和国初期における「社会教育」と大衆運動

―天津市の事例から―

戸部　健

はじめに

中国に近代教育が本格的に導入されるようになったのは二〇世紀初頭である。しかし、政変や戦争などの影響を受け、小学校のレベルですらそれはなかなか普及しなかった。そうした情況は南京国民政府期の一九二〇年代後半以降徐々に変わり始め、都市を中心に就学率の上昇が見られるようになる。そして、政府による各種督促行為が功を奏したこともあり、一九五〇年代にはかなりの改善が見られた。一方、初等教育の不備を補足する目的で学校外教育、すなわち「社会教育」[1]も特に一九二〇年代後半以降急速に発展する。そして、やはり一九五〇年代になるとこうした「社会教育」（図書館、博物館、文化館および識字班〔識字クラス〕など）と関わりを持つ人の数が史上空前となった。このように、中国では一九二〇年代後半以降、社会で暮らす相当数の人が初等教育であれ「社会教育」であれ、何らかの近代教育と関係を有するように

なった。ここで重要なのは、周知のようにこの時期中国は国内（国共間の争いなど）、そして国外（満洲事変、日中戦争、朝鮮戦争など）において極めて大きな危機を抱え続けていたということ、そしてそれとの関連で、時代を追うごとに国が教育に介入する度合いが強くなっていったことである。こうした情況は、国家と社会の関係にとってどのような意味を持ったのであろうか。

以上のような問題関心のもと、筆者はこれまで華北の開港都市である天津の「社会教育」を例に、二〇世紀初頭から一九四〇年代までの情況を検討してきた。[2] 本稿はそれを引き継ぎ中華人民共和国初期、特に一九四九年から一九五三年までの天津における「社会教育」の動向について考察する。それに加えて、当時盛んに展開された各大衆運動と「社会教育」との関係について明らかにしたい。なお、「社会教育」が扱う業務の範囲は非常に広いので、本稿では、「社会教育」の末端機関の一つである文化館という施設が行った識字教育および宣伝の動向を中心に検討する。また、必要に応じて、関連する団体（工人業余学校、識字運動委員会）による識字教育についても触れる。

本課題に関する先行研究について整理する。まず当該時期の「社会教育」についてだが、当然のことながら教育史の枠組みで論じられたものが多く、歴史学的な視点、および前述のような問題関心から論じたものはほとんどない。[3] 近年、筆者は長期的な視野のもとに清末から一九五〇年代初頭の天津における「社会教育」について概観した。[4] ただ、そこでも一九五〇年代初頭の動向については史料上の問題もあり、ごく簡単な考察に留まっている。

他方、都市を中心にこの時期、抗美援朝運動（朝鮮戦争に際してアメリカに反対し北朝鮮を援助）、反革命分子鎮圧運動（国民党や反共産党系組織の関係者、「匪賊」、宗教的秘密結社などの取締り）、民主改革運動（知識人の思想統制）、三反運動（党や政府機関および国営企業における汚職、浪費、官僚主義に反対）、五反運動（民営企業の贈賄、脱税、加工における原料の抜き取りと手抜き、国家資材の窃取、国家の経済情報の摂取に反対）など様々な大衆運動が展開されたが、こう

した問題についてはすでに多くの研究が出ている。そのうち本稿の問題意識と関係するものとして泉谷陽子氏、金野純氏、岩間一宏氏の著書および日本上海史研究会の論文集などが挙げられよう。[5] それぞれ大衆運動によって国家と社会との関係、社会や階層構造などが変化したことについて明らかにしており、示唆に富む。ただし、各氏ともに、大衆運動において「社会教育」が果たした役割についてはほとんど論じていない。また、泉谷氏の研究を除き、考察地域が上海に偏っているのも特徴的である。[6]

以上のように、本稿の関心に応えるような研究は現在のところ見つけることができない。そこで以下では、主に天津市檔案館所蔵の「天津市文化局」・「天津市識字運動委員会」関係檔案および天津市教育局から発行されていた『天津教育』（中国国家図書館のものを利用）という雑誌に掲載された記事などをもとに、人民共和国初期天津における「社会教育」の動向およびそれと大衆運動との関係について検討していきたい。なお、当該時期天津における各大衆運動についてはケネス・リバソール氏が概観しており、[7] 本稿を纏めるに当たって大いに参考にしたが、抗美援朝運動と反革命分子鎮圧運動（以後、反鎮運動と略す）などに関して筆者と見解が異なる点もある。適宜指摘しながら論を進めていきたい。

第一章　「社会教育」の展開

国共内戦中の一九四九年一月一五日、天津は共産党によって「解放」された。共産党軍は早速天津の各行政機関の接収に取りかかった。接収対象にはもちろん教育局や各教育機関（市立の中等学校、小学校、民衆教育館、図書館、体育場）も含まれていた。ただ、接収の過程で職を追われた者は、教育局の職員を除けばそれほど多くなく、特に教育機関においては少なかったようである。[8] 例えば、中等学校の教職員の場合、訓育主任や極端な反動分子以外は現職のまま留め置かれ

た。[9] 授業についても、公民や党義など「反動的」な課程を排除した上で、二月三日までに全学校で再開されている。[10] その後、夏休み期間中の七・八月に中・小学校の教職員の思想教育を目的とした講習班が開催され、市立中・小学校の全教職員の四〇％に当たる二〇四四名が参加した。「社会教育」の教職員に対しても八月一九日に社会教育工作者大会が開かれ、二百人余りが参加している。[11] このように天津では、中華民国時代の遺産を改造しつつ利用することで、新時代の教育をスタートさせることになった。以下本章では、「社会教育」に焦点を絞り、その一九五三年までの動向を概観する。

一　初等教育の普及状況

そもそも当時の天津には、「社会教育」を受けるべき対象がどの程度存在していたのであろうか。「社会教育」の動向について検討する前に、その点についてまず確認しておきたい。

清末以来、「社会教育」の主な対象者は「失学者」、すなわち学齢に達したにもかかわらず小学校に通学していない児童（「失学児童」と呼ばれた）、そして失学者のまま大人になってしまった者（「失学民衆」と呼ばれた）であった。そのうち、「失学児童」については、一九三〇年代以降徐々にではあるが着実に減少していた。[12]

なお、一九五一年三月に出版された『天津教育』第一〇期に掲載された張国藩「天津市一九五〇年教育工作的基本総結」には、一九五〇年における就学情況について詳しい記述がある。それによると、市・私立小学校総数は四一六校、学生は一七万五六四〇人、さらに省立小学校、人民義務小学校、私立補習小学校の学生を加えると一八万五六一八人となる。一九五〇年七月に公安局が行った調査によると、市内の学齢児童（七～一五歳）は二四万七四六四人なので、就学率は七五％となる。[13] 正規の小学校ではない人民義務小学校、私立補習小学校の学生数を除いても就学率は七〇％を超える。ここから、一九五〇年の段階で、天津における「失学児童」はかなり少なくなっていることが分かる。この趨勢はその後も

続いた。ここから、一九五〇年代以降の天津において、「失学児童」は「社会教育」の対象からほぼ外れたと言うことができる（図書館や博物館などとの関わりは別だが）。

以上の状況より、当時の「社会教育」の対象は主に「失学民衆」であり、その多くは文盲の下層労働者や婦人、そして老人であった。そのため、彼らに対する識字教育が当時盛んに行われるようになった。具体的には、工場では工人業余学校が、それ以外の街区（当時「街道」と呼ばれた）では文化館に組織された識字班がそれぞれ識字教育を実施した。

二　「社会教育」の普及状況

この時期、「失学民衆」に対する教育が隆盛したのには他にも理由がある。日中戦争期に毛沢東は『聯合政府について』において「全人口のうち八〇％の人々から文盲状態を取り除くことは新中国を建設するために必要な条件である」、「今後政府は計画的に広範な人民・群衆の内から各類の知識分子幹部を養成すべきである」[14]などと述べた。このなかで重要なのは、人民・群衆を教育（特に識字教育）し、積極分子を幹部として取り立てるという方向性が示されたことである。この指摘は、その後の「社会教育」にも確実に受け継がれた。例えば、『天津教育』創刊号に掲載された陸定一（共産党中央宣伝部部長・当時）「新中国の教育と文化」にも次のように書かれている。「私たちは七年、あるいは十年後に、高等教育を受けた万を数える工業労働者・農民出身の知識分子が中国に登場するのを待ち望んでいる。彼らは、そのような決心を持って祖国、人民、工農兵のために服務しているその他の階級出身の知識分子たちとともに仕事をし、経済建設、文化建設、国防建設の基幹となるだろう」[15]。以上の流れのなかで、全中国的に「群衆」（労働者、農民、婦女など、「失学民衆」を多く含む）、特に工場労働者・農民に対する教育が活発化していったのである。

その際、こうした教育に中心的に取り組んだのが文化館・工人業余学校・識字運動委員会である。以下では、その具体

的な活動について見ていきたい。

（一）文化館

文化館（当初は人民文化館と呼ばれた）とは、民国期に民衆教育館と呼ばれていたものが「解放」とともに改組されたもので、言うなれば総合的な「社会教育」施設である。その活動範囲は非常に広く、天津市教育局による「一年来の天津社会教育に関する工作概況」という史料によると、一九四九年の時点で活動内容は、補習教育、補習班、工人補習班、識字班のような失学者に対する教育活動や、文芸・娯楽活動、写真展示、書籍や新聞の閲覧のような文化活動、そして口頭宣伝や文字宣伝のような宣伝活動にも及んでいた。[16] その具体的な成果（一九四九～一九五八年）は**表一**のとおりである。数字の不備があるために極端に数値の低い一九四九年・一九五〇年と、大躍進のために極端に数値が高い一九五八年を除けば毎年おおむね一五〇万人から四〇〇万人程度が文化館の活動に

【表１】天津市文化館各種活動統計（1949～1958年）

西暦	放映電影・幻灯		展覧会		文芸演出晩会		講座報告	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
1949	5	2,500	9	16,000	78	22,790	93	23,900
1950	10	16,429	71	135,865	236	117,390	425	109,322
1951	229	206,745	75	308,741	369	358,494	193	91,120
1952	416	371,402	90	236,087	1,042	582,366	295	282,470
1953	573	463,707	78	365,027	1,234	676,269	322	141,805
1954	890	531,572	116	327,657	1,481	782,178	324	104,325
1955	1,211	767,699	93	486,191	1,330	762,533	426	98,897
1956	921	465,736	164	833,518	2,044	1,185,382	527	198,278
1957	912	219,733	152	1,176,641	2,425	1,299,007	759	265,158
1958	1,739	598,877	326	6,953,116	8,169	4,956,407	585	379,559

西暦	座談会		遊芸活動		節目総合活動		その他		合計	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
1949	19	1,235	4	5,400	5	1,000	0	41,288	213	114,113
1950	54	2,772	9	5,640	0	0	66	342,004	871	729,422
1951	149	39,237	18	8,636	30	26,652	131	649,042	1,194	1,688,667
1952	817	25,921	34	35,418	30	59,500	3,429	1,308,366	6,153	2,901,530
1953	1,007	61,214	9	10,366	116	75,391	10,121	1,515,663	13,460	3,309,442
1954	203	6,955	14	28,922	80	95,121	103	404,765	3,211	2,281,495
1955	254	7,476	32	37,391	113	85,324	111	1,132,499	3,570	3,378,010
1956	158	12,863	132	69,428	241	225,628	332	834,625	4,519	3,825,458
1957	213	8,369	633	70,442	119	145,485	5	2,500	5,218	3,187,335
1958	289	11,295	399	99,583	281	1,089,500	4,579	3,081,241	16,367	17,169,578

（註）塘沽区のデータは除く。1949年と1950年のデータには欠落がある。
（出典）文化局檔、X199-1-855、天津市文化局計財処「文化局関於図書館、博物館歴年蔵品情況報告表及文化館十年資料」所収、「天津市文化館工作十年資料」（1961年５月31日）。

参加していたということになる。一九五一年段階の天津市（市内区）の人口が二〇六万七七八五人、一九五八年のそれが二七七万四一一〇人なので、大雑把に言えば一九五二年以降、市民一人につき年間最低一回は文化館主催の活動に関与したことになる。しかも、ここには文化館主催の余暇活動（読書組、美術小組、幻灯放映組、各種文芸組織、創作組、倶楽部など）や後述する識字班の参加者数が含まれていないので、実数はこれよりも多かった。[17] もちろん、一人で複数の活動に参加する人もいたであろうから、これをもって文化館の活動が天津市の市民すべてをカバーしたということはできない。ただ、少なくとも数字だけ見れば、民国期に比べ「社会教育」の及ぶ範囲が驚異的に広まったと言うことができる。

（二）識字班（識字学校とも呼ばれた、以下「識字班」で統一する）

文化館は「失学民衆」に対する識字班の運営もしていたが、それについては他の団体とも関連するので、ここで別個に論じたい。

国共内戦期において、天津の識字教育を主導していたのは民衆教育館であり、例えば一九四六年八月には一二〇の識字班で合計五二八五人の学生が学んでいた。[18] そのため、「解放」後も、区政府文教科や地元の派出所のサポートのもとで、文化館が識字班を指導することになる。学生数は一九五〇年七月段階で八五五二人、[19] 八月には一万一六七人、[20] 一一月には一万二八六〇人、[21] そして一二月には一万三七〇九人[22]というように急激に増加し、一九五一年四月には三万人を超え、[23] 七月には五万五三二六人に達した。[24] なお、学生の構成は一九五〇年までは九割が婦人であったが、[25] 一九五一年以降労働者や農民、特に都市部においては労働者の割合がそれを凌駕していく（一九五一年四月の段階で労働者と農民が全体の六〇％を占めた）。[26] 都市において労働者の割合が増えた原因として、工場以外で働く労働者（多くが雑業層）や、失業青年を取り込み始めたことなどが考えられる。

なお、これら識字班での教育には、主に地域在住の失業知識分子や知識婦女、威光や人望があり教育に熱心な群衆が無

償で当たった。[27] 実際には、地域の失学青年や婦女が当たることが多かったが、この点については後述する。また、識字班の経費については、基本的には群衆が自弁し、不足分を政府が補助するという方針が採られており、例えば一九五一年上半年の記録によれば、経費の七七・九%を群衆が出資し、残りの二二・一%を政府が援助していた。[28]

このように、識字班は、基本的には各文化館の指導の下、区政府文教科や地元の派出所などの協力を仰ぎながら、主に工場労働者以外の人々に対して識字教育を行うものであった。一方、一九五〇年の調査で、天津で働く労働者三二万四〇〇〇人のうち一九万四〇〇〇人が文盲とされていたが、[29] 彼らに対する識字教育はどのようになっていたのであろうか。また、識字以外のことを学びたい人々に対する教育はどうしたのだろうか。こうした人々をケアするために設置されたのが、工人業余学校である。

（三）工人業余学校（職工業余学校とも呼ばれた、以下「業余学校」で統一する）

業余学校は、主に労働者向けの教育機関で、総工会（労働組合）主導の下「解放」初期より設立され始めた。その後、天津市第一回各界代表大会での議論や全国教育会議などの指示を受け、一九四九年九月以降教育局工農教育科と総工会教育科がその活動を主管することになり、本格的な発展が始まる。学生数は一九四九年九月の段階で五八六七人（一九二班）、一九五〇年七月の段階で四万九四二八人（一三三一班）というように、着実に増加した。[30] さらに、一九五〇年七月一七日にはそうした活動を主導する職工業余教育委員会がやはり教育局と総工会を中心に結成され、余暇教育の組織化がいっそう進んだ。この過程で、業余学校は工場に設立される廠校と、各区の小中学校に設立される区校（工場の近くに設置された）とに分けられた（そのほかに、幹部の教育を行う幹部業余学校もあった）。[31] **表二**は一九五〇年七月における業余学校の班数・学生数などについて示したものである。

業余学校の修学年限は二年で、学生は週五日、一日二時間の学習が義務づけられた。また、学生の能力によりクラス分

けされ、初級小学校レベルでは国語と算術を、高級小学校レベルでは国語・算術・常識を教育した。初級中学校レベルのクラスも設けられ、一年レベルでは国文・算術・歴史を、二年レベルでは国文・代数・地理を、三年レベルでは国文・幾何・理科を教授した。ただ、**表二**からも分かるように、九割近い学生が小学校レベルのクラス、しかも全体の四分の一強が初級小学校一年レベル、つまり識字から学ぶクラスに属していた。[32] なお、識字班と違い、教員は原則小中学校の教員が担当した。

業余学校も識字班と同様、学生数を増やしていき、班数／学生数は、一九五〇年一〇月の段階で一七五八班／七万一七五四人を数えたが、次に述べるように一九五二年に識字運動委員会が成立したことを契機として、識字から学ぶ学生に対する教育から一時的に離れたようである。[33] 一九五三年の業余学校についての統計資料を見ると、初歩から学ぶ学生の割合が大きく減っているのが分かる（教学進度別の学生数：第一教段五人、第二教段一万八三六二人、鞏固段〔学習内容を定着させる段階〕八万五九五三人、既卒者八七三五人）。[34] 初学者は、識字運動委員会が主導する識字班に吸収されたものと推測できる。ただ、それでも一三万四五一四人もの学生が業余学校で学んでいた。

（四）識字運動委員会

一九五二年、中央政府の指示の下、全国でかつてない規模の識字運動が始まった。よく知られているように、人民共和国期に大規模な識字運動が全部で三回（一九五二年、一九五六年、一九五七年）行われたが、これはその第一回目のものであった。こうした

【表２】天津市工人業余学校統計（1950年７月）

校別		校数	班数	学生数										
				初等小学				高等小学		初等中学			高等中学	合計
廠校		44	375	9,599				1,881		1,186			82	12,748
区校	中学校	30	238	4,547				1,274		3,187			0	9,008
	小学校	91	657	21,543				3,308		160			0	25,011
幹部		7	61	1,018				494		1,149			0	2,661
合計		172	1,331	36,707				6,957		5,682			82	49,428
学年別の学生数	学年			1年	2年	3年	4年	1年	2年	1年	2年	3年	1年	
	学生数			14,836	9,496	7,228	5,147	4,697	2,260	4,651	961	70	82	

（出典）工農教育科「天津市職工教育統計資料」『天津教育』第４、５期、1950年、82頁。

動きの起爆剤の一つとなったのが、解放軍の兵士の祁建華という人物が自らの経験をもとに速成識字法という方法を編みだしたことである。この方法は一九五二年四月六日付けの『人民日報』を通して全国に広められ、注目を集めた。そして、同年五月一五日に教育部が「各地で速成教育法の教学実験を展開することに関する通知」を出し、河北省をその実験区とすると、識字教育熱が全国でわき起こった。[35]

天津では早くからこの実験が始まっていた。それと言うのも、同年四月六日の全国職工教育委員会常務委員会拡大会議において、天津は北京とともに速成識字法の重点地区に選定されていたからである。早速学費徴収に関する条例の制定や教員の養成などが開始された。そうした準備の過程で六月二〇日に天津市識字運動委員会が成立する。[36]

天津市識字運動委員会は文教委員長、教育局、公安局、文化局、市総工会、民主婦女聯合会、中華全国青年聯合会、文学芸術界聯合会など関係機関・団体によって組織され、市長が主任委員に、総工会主席と文教委員会主任委員が副主任委員に就任した。市識字運動委員会の下には区識字運動委員会、産業系統識字運動委員会、天津県識字運動委員会が設置され、それぞれ区、企業、天津県における識字運動を担当した。[37] 同時に、従来各区に設置されていた識字班および各区・工場に設置されていた業余学校の一部は、基本的に当該の識字運動委員会の指導下に入ったものと思われる。

以来、天津では識字教育のさらなる発展が見られた。識字班の班数／学生数は最大で七七一二班／三二万七七三四人に上った（一九五二年八月）。しかも、従業員三〇〇人以上の工場や企業に務める文盲の人々は基本的にみな識字班に入学したという。学生で最も多かったのが産業工人（産業労働者、三五％）で、あとは家庭婦女（職工家庭を含む、三二％）、行業工人（職人層、一五％）、農民（八・八％）、一般労働市民（五・八％）、その他（二・九％）、機関幹部（雑用人員を含む、〇・五％）というように続く。[38] 以上から、工場・企業だけでなく街区でも満遍なく識字班が展開されていたことが分かる。[39]

このように、人民共和国初期の天津では文化館による各種活動や各機関による識字教育など、「社会教育」が幅広く展開

されていた。そして、そうした活動の影響が及んだ範囲は、天津に近代的な「社会教育」が導入されて以来最大であったと言える。これにより多くの人が字を学んだり、様々な知識を得たりすることができた。また、一部の人は文化館が主催するサークルなどに参加して、余暇活動を充実させることができた。ただし、「社会教育」は、民衆への教育だけに効果があったわけではない。政府の意向を民衆に宣伝する上でも力を発揮した。次章では宣伝の道具としての「社会教育」のあり方について、史料の都合上、抗美援朝運動と反鎮運動での動向を中心に検討していく。

第二章　「社会教育」と大衆運動

建国後間もない一九五〇年六月、朝鮮戦争が勃発した。当初中国は静観の構えであったが、国連軍と韓国軍が反撃し、その勢いが同年一〇月に鴨緑江にまで達すると、遂に人民志願軍を朝鮮半島に派兵することになる。その後、中国政府は、参戦への民衆の支持と支援を取り付けるため、抗美援朝運動という大衆運動を国内において展開するようになった。

また、朝鮮戦争の勃発およびそれへの中国の参戦は、建国以来全国各地で比較的穏健なかたちで展開されていた反革命分子の打倒の動きを厳格化させることになった。反鎮運動と呼ばれるこうした大衆運動は当初農村において激しかったが、一九五一年二月二一日に中共中央より「大都市で真剣に厳格に大規模に反革命を鎮圧すべし」という指示が発出されると、都市でもその動きが加速するようになる。[40]

これらの運動はもちろん天津でも見られた。天津史の年表として最もよく纏まっている『天津通志　大事記』を見ると、抗美援朝運動は一九五〇年一〇月末以降に、反鎮運動は一九五一年二月下旬以降に激しくなっているのが分かる。[41] 以上の運動において、「社会教育」はどのような役割を果たしたのであろうか。

一　文化館・識字班・業余学校での宣伝

朝鮮戦争への参戦後、『天津教育』では愛国主義教育の重要性が強調されるようになる。第一〇期に掲載された「天津市一九五一年教育工作計画綱要」でも、「第一部分　方針任務」の筆頭に「愛国主義教育を踏み込んで行う」[42]ことが述べられている。その方針は当然文化館や識字班・業余学校でも貫徹された。

文化館では、映画や展覧会、講座、文芸演出、座談会など様々な方法で宣伝を行っていた。そもそも文化館の主要な任務は教育と宣伝であるので、当然と言える。文化館が主催した各種活動における宣伝の内容については史料が集められていないため知ることができないが、基本的には党や政府の要請に沿った内容であったと思われる。ちなみに、その規模については、**表一**で示したとおりで、非常に多くの人を動員できていることが分かる。

識字班でも宣伝がなされた。例えば天津市の郊外での例だが、大沽にある文化館の分館で識字班の教師をしていた崔鳳舜は自らの教育経験を次のように報告している。「〔授業においてソ連の農民の生活について紹介した上で〕この時私は一転して重々しい口調で〔学生たちに向かって〕次のように言った。『私たちの生活はよくなったばかりです。しかしアメリカ帝国主義が私たちに良い暮らしをさせず、我らの台湾を占領し、我らの隣邦である朝鮮に進攻しようと企み、さらには我ら中国にも侵略し、我らを再び圧迫しようと夢想しています。みなさん、憎いですか？』。生徒はみな答えた。『憎い！』」。また、崔は、学生の興味を引くために、朝鮮での人民志願軍の活躍などについての話を利用したとも述べている。「『夜渡青川江』、『四個大飯桶』、『雲山戦役』[43]について講述した時、学生たちはみなうっとりしながら話を聴いていた。なかには『アメリカが中国を侵略しようなんて妄想に過ぎないよ！』と言う学生もいた。その後、授業に行くたびに学生たちは〔朝鮮での〕戦闘について話すよう私にねだった。私は、その勢いを借りて、彼らの関心を読報〔新聞の講読〕の方面に導いた」[44]。こうした記述から、崔は時には感情に訴え、また時には楽しませたりしながら、抗美援朝の精神を学生たちに伝えよ

うとしていたことが分かる。

反鎮関係の宣伝については、朱慧生「抗美援朝の高まりの中での工農群衆識字班」にその具体例が見える。例えば、第一区文化館での例。「第一区文化館が識字班で、特務〔国民党などのスパイ〕を捉えた経過について姚おばさんに話をしてもらった後、ある六〇歳の生徒が次のように言った。『姚おばさんに学ばなければ。以前は特務を捉えるということがよく分からなかったが、今回よく分かった！生活は現在よくなったけれど、いまだ解放軍が国民党反動派を追い払ったわけではない。彼らが再び帰ってきて攪乱するようなことがあってはならない！』」。第三区での情況についても次のように述べられている。「第三区のある学生は、王蘭成が彼の父親を検挙したことについて親不孝だと思っていたが、学習を通じて、親戚や友人であっても、人民に害を与える以上、我らの敵であると、彼ら（ママ）は知るようになった」。その他の区でも、識字班での教育が特務や悪覇（悪の顔役）の検挙に繋がったことが紹介されている。[45] このように、識字班での宣伝は、家庭や地域にかくまわれていた反革命分子のあぶり出しを目指していた。

以上はすべて識字班での例だが、業余学校でもおそらく同様のことが行われていたものと推測する。関連史料を手に入れていないため詳しくは分からないが、少なくとも各業余学校において時事教育、授業前の十分間讀報、ラジオの視聴、座談会の開催などがなされ、労働者の政治的な覚悟と愛国意識が啓発されていたようである。ただ、むしろ業余学校において目立つのは、授業以外の場での宣伝であろう。例えば、劉少夫「職工業余学校は時事宣伝の重要な陣地である」という記事によると、一九五一年四月一四日に市総工会第三区辦事処が小型工場（従業員三～五〇人の工場）を対象とした座談会を開いたが、そこに参加した二一の工場中一六の工場で比較的順調に抗美援朝の宣伝がなされていたという。また、その具体的な動きとして、讀報組（新聞講読サークル）、宣伝大会、反革命分子鎮圧の実況中継の視聴、〔反革命分子〕控訴大会、抗美援朝講演コンクール、献金運動、宣伝隊の組織などが挙げられている。ここから、宣伝の方法にはかなりの

多様性があったことが分かるだろう。なお、これら一六の工場にはすべて業余学校が設置されており、そこでの学習が上記のような課外活動を成功させるのに大いに役立ったことが指摘されている。[46]

二　家庭や社会での宣伝

文化館や識字班・業余学校での宣伝は、教育現場以外にも影響を及ぼした。実際、文化館や識字班、そして業余学校はそれぞれを拠点に、付近の地域に対して宣伝の影響力を拡散させようと考えていた。そこで注目されるのが、いくつかの史料に散見される「空白を消滅させる宣伝」、そして「宣伝ネットワーク」という用語である。[47]ここから、「社会教育」を利用して、文字の読めない労働者や婦人のような、これまで教育・宣伝の及んでいなかった「空白点」にまで宣伝の網を掛けようとする政府の意図が窺える。それを実現させる上に大きな役割を果たしたのが、特に文化館によって組織された宣伝隊であった。

文化館の宣伝隊は、同館が組織した識字班と密接な関係がある。というのも、文化館は、識字班に通う学生の一部に対し宣伝隊を組織するよう促したからである。[48]こうした活動に関する詳しい動向は、『天津教育』に散見される。例えば第四区の文化館では、識字班で学ぶ学生を説得した上で、毎班五～七人からなる宣伝隊を六四小組組織した（構成員の多くが婦人）。宣伝員は、文化館で講習を受けた後、米国帝国主義と日本の再武装に反対する連続図画一セットを受け取り、早速宣伝活動に従事した。宣伝の方法は、各家庭の主婦を一カ所の住居に集め、世間話をするような方法で米国帝国主義と日本の再武装に反対し反革命分子を鎮圧する重要性について説くというものであった。[49]『天津教育』には、こうした活動の成功例がいくつか掲載されている。そのうちの一つを少々長くなるが以下に引用する。

唐家口婦女識字班模範学員の劉文栄は、忍耐強く一軒一軒を回って宣伝を行っている。ある日〔彼女は〕隣に住む王淑蘭の家に宣伝に行った。彼女たちは世間話から始めて、だんだんとその話題は過去に日本軍や特務漢奸が中国の庶民を姦淫し、焼き殺し、迫害した情況に移っていった。劉文栄は言った。「私の父親は漢奸に徴用されて、そのために死ぬほど苦しんだのよ」。ここまで言って彼女は涙した。しかし、彼女は涙を飲み込み、こう言った。「今日、すべての人が政府を助けて匪賊の特務を逮捕する責任があるはずだわ」。王淑蘭は強く同情しつつも「もう解放されたのだから特務に何ができるというの」と言った。そこで、劉文栄は、匪賊の特務がいまだに国家や人民に害を与え続けていることや、姚おばさんが特務に捕まった経過を彼女の聞かせ、さらに「自分の父親が特務だったとしても、私たちは情実にほだされてはいけないわ、検挙しなければね」と言った。劉文栄の一言一言は王淑蘭の心を揺さぶった。

ここで登場する王淑蘭の夫には、実は特務をしている友人がいた。彼自身は反革命的な行為に手を染めていなかったが、苦しむ友人を放っておくことが出来ず、いろいろと手助けしていた。妻の王淑蘭もそのことを知りながらそれまで黙っていた。しかし、宣伝隊としてやって来た劉文栄の言葉に彼女は改心し、ついに夫の友人を検挙した。王淑蘭はその後文化館の識字班に参加するようになったという。[50] ほかにも例えば、第五区の識字班が控訴一貫道罪行大会を開いたところ、一一五人の一貫道信者を退会させることができた（第五区では八九名が退会）とする記事もある。[51]

もちろん、以上で述べられているような宣伝の「成果」には誇張もあるだろう。ただそれでも、宣伝内容を社会の隅々に伝える上でこうした宣伝隊が果たした役割は大きかったと思われる。宣伝員はその後も増加し、文化館が把握していたところでは一九五三年までに全市で一万一三二四人に達したようである。[52]

このように、識字班は、不識字者に字を教えるだけでなく、学生の一部を宣伝に動員し、さらに一部の積極分子を宣伝

員としてリクルートする役割も果たしていた。注目すべきは、そうした積極分子のなかには、基層社会（街道）におけるその他の活動に参加する者も出てきたことである。「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」には、第五区の邱文華が識字班で学習した後に衛生組長、街道宣伝員になったことや、第二区の洪福亮が婦女代表になったことなどが紹介されている。[53]

一方、業余学校で宣伝隊が組織されたという事例は、現在のところ本章第一節で紹介したものを除き確認できていない。恐らく、独自に宣伝隊を組織する必要がそれほど強くなかったのであろう。というのも、工場に設置された業余学校（廠校）であれば特段外部に向けて宣伝活動を拡大させる必要はなかっただろうし、学校に設置された業余学校（区校）の場合も普通科の学生を動員して宣伝隊を組織していたと考えるからである。[54] むしろ、業余学校としては、従業員が少なく労働組合や業余学校が設立されていない零細企業にまで業余学校を設立することで、宣伝の影響力を拡げようとした。そのようにしてはじめて宣伝工作上の「空白」を消滅できると考えていたのである。[55]

以上、抗美援朝運動および反鎮運動において「社会教育」が果たした役割について検討してきた。その結果、文化館・識字班・業余学校ともに宣伝機関の一角としても大いに活躍したことが明らかになった。特に文化館によって組織された宣伝隊は、社会（特に街道）の隅々まで宣伝を及ぼすのに大きく貢献したし、「反革命分子」をあぶり出す上でも力があった。政府による宣伝がこれほど社会の深くにまで及んだのは、近代以来の天津においてやはり初めてのことである。

また、宣伝などに従事する積極分子のリクルートに、識字班が貢献していたことも確認できた。こうした積極分子のなかには、第三章でも述べるように、一九五二年秋以降に各街道の政府出先機関・自治組織（街公所・居民委員会）で幹部として活躍する者もいた。その意味で、革命後における新たな基層組織構築に際して、識字班やそれを管轄した文化館が果たした役割は大きかったと言うことができる。[56]

一方で、大衆運動での宣伝が激しくなれば激しくなるほど、それによって苦しんだ人々（特に「反革命分子」と呼ばれ

た人々）も多かったと考えられる。しかも、実際「社会教育」は運用の面で様々な混乱が見られ、党や政府でさえ把握しきれないこともあった。そうした混乱は宣伝や教育の効果を減少させた。さらには、混乱によって宣伝・教育内容があらぬ方向にねじ曲げられ、運動による被害者を無用に増やしてしまった可能性すらある。それこそが当時の「社会教育」の限界であったと言えよう。次章ではそうした混乱のありようとその原因、そしてそれへの対応について検討する。

第三章　「社会教育」の限界

混乱の主な原因として挙げられるのが、識字班・業余学校の教員、そして文化館の宣伝員を担当する人材の質と量が不足していたことである。この問題のために、教育の面でも宣伝の面でも、「社会教育」には限界があった。以下それについて、識字班での事例と文化館の宣伝隊での事例とに分けて論じたい。[57]

一　識字班の教員

速成識字法を利用した大規模な識字運動が一九五二年より天津を含め全国的に展開されたことは第一章でも述べた。この運動は一定の成果を生んだが、実は問題も多く、一年ほどで幕を閉じることになる。運動がうまくいかなかった原因としては、運動に猪突猛進し、量を重んじ質を軽視する傾向が見られたこと、各地の実情や学習条件を無視して画一的に速成識字法を進めたこと、またそれが多くの脱落者や非識字者への逆戻りを生み、識字運動の展開に悪影響を生んだこと、などが指摘されている。[58] ただ、それに加えて識字班を担当した教員の質についても考慮する必要がある。

教員不足の問題は近代以来の中国において常に頭の痛い問題として存在し続けていた。小学校などに通う学生の数は年々

増え、学校の数もそれに応じて増加していったが、肝心の教員の数はそれに追いついていなかった。そのような状況において、正規の教員が、業余学校ならまだしも、識字班の教育にまで手が回るはずがなかった。そのため、識字班の教育は主に群衆（主に失業知識分子や婦女）のなかから採用することになった。これにはもちろん、第一章で述べたように、当時共産党が人民・群衆から積極分子を幹部に取り立てる方向性を示していたことも関係していよう。

ただし、こうした教員（群衆教員と呼ばれた）の多くは、教育能力という点で問題を抱えていた。その事実は識字教育に関わる幹部によってすでに早いうちから認識されており、例えば「天津市群衆識字教育一九五一年上半期工作総結」に、「大部分の教師が教学能力の上で要求に応えることができない」と指摘されている。加えて、「能力がある者はみなその他の職場に移ってしまう」とも述べられている。その対策として、各区に教学研究会または研究小組を組織したり、教師座談会を開催したりした。[59] または各区に一校ずつ識字教師業余学校を組織して、区の識字教員の少なくとも半分を入学させるとともに、教育活動を行っていない失業青年や家庭知識婦女にも入学を促した。[60] こうした措置がどの程度効果があったかは現時点ではよく分からない。

以上の問題は、速成識字法による識字運動が始まる一九五二年になっても一向に解決しなかった。識字運動を始めるにあたり、天津では一九五二年五月から七月までの間に識字教員を九七〇八人養成したが、そのうちもともと業余学校の教師だった者が一〇五八人、小学教師だった者が一六二人、工農師範学校の学生だった者が一六七九人、識字班の教員だった者が九一五人、群衆義務教師として新たに採用された者が五八九四人であった。このなかで特に問題だったのが群衆義務教師（ボランティアの群衆教師）であり、主に労働者や街道の積極分子、家庭婦女、農民などによって構成されていた。[61] これら識字班教員の学歴について、一九五三年上半期に第四区で行われた調査の記録が残っている。それによると、彼らの学歴は、全教員三二一人中、高等小学校程度が最も多く一六三人、ついで初級中学校在学程度が八二人、初級小学校程

度が三三人、初級中学校卒業程度と高等中学校卒業程度がともに一九人、高等中学校在学程度が一二人、大学程度が三人となっていた。[62] 初級小学校程度から初級中学校在学程度の学歴の者が全体の約八七％を占めており、総じて教員を担当するにしては低学歴なのが分かる。

そのため、教員の中には、その任に堪えられず授業に行くのを怖がって泣き出してしまったり、[63]「貪汚」、「浪費」など、運動においてよく使う字ですら書けない者もいた。教室によっては秩序が大いに乱れ、授業中に間食をしたり秧歌を歌ったりする生徒まで出る始末だったという。[64]

二　宣伝隊の宣伝員

一九五〇年以降各大衆運動において活躍した文化館の宣伝隊も、一九五二年になると大きな問題に直面する。一つは、識字班の教員と同様、宣伝員の質についての問題である。宣伝員は多くが群衆のなかの積極分子から採用されていたが、彼らの能力は玉石混淆であり、任務をうまく遂行できない者もいた。例えば第九区の宣伝員について言及したある史料では、区内のある読報員が、「人為財死、鳥為食亡」（金銭や食べ物を追求したために身を滅ぼした者たちを描いた寓話）という話を使って三反運動を解説しているのを、「政策を曲解している」として問題視している。[65]

第二の問題は、宣伝隊の管理についてである。名目上、識字班の宣伝隊を管轄するのは各区の文化館であり、またそれら文化館は各区政府文教科の指導下にあった。[66] ただ、リバソールも指摘しているように、当初区政府において宣伝工作に積極的な党幹部は少なく、文化館に対する指示も不十分であった。[67] そのため、文化館が中心となって宣伝隊を管理せざるをえなかったが、仕事量に比して常勤職員の数が足りず、職務に支障をきたした。しかも、各運動の進展とともに文化館以外の機関・団体（婦聯、派出所、建政組、抗美援朝支会、中蘇有協支会、衛生科など）でも宣伝隊を組織するようにな

り、管理の上でさらに混乱するようになった。特に、個々の宣伝隊同士の連携不足による弊害がひどかったという。文化館が物資交流展覧大会の宣伝を準備していた時に派出所が防奸模範の選抜について宣伝する（第九区の例）など、宣伝隊ごとに個別の対応をしていたことが報告されている。[68]

第三の問題は、個々の宣伝員が宣伝員以外の職務を兼ねるようになり多忙化したことである。これは、能力が不足している宣伝員がいる反面、能力の高い宣伝員には逆にたくさんの仕事が集まってしまっていたことを意味する。そのため、一部の者は食事をする時間すらないほど多忙を極めることになったという。一方で、宣伝員のなかには名誉や単に出しゃばりたいために兼職を多くする者もいたとされる。いずれにしても、このような状態では宣伝活動に専心するのは難しかったであろう。そのため、ところによっては宣伝活動を欠席する宣伝員がいたり、形式的な宣伝で済ましたりするところもあったようである。[69]

三　各事業の整理

以上のような問題に対応するため、一九五二年から五三年にかけて各事業は整理されるようになった。その具体的なありようを識字班と宣伝隊とに分けて見ていく。

（一）識字班の整理

教員の質を問題視した識字運動委員会は、一九五二年一一月に能力に問題のある教員の整理に取りかかった。[70] その結果、確かに初級小学校を最終学歴とする教員の割合は減り（〔一九五二年八月→一九五三年三月、以下同じ〕三一％→三・四％）、逆に初級中学校在学ないし卒業を最終学歴とする教員の割合が増加した（二〇％→五六・九％）。ただ、それは能力の高い教員を新たに採用したことによるものではなく、単に能力の低い教員を解雇したことによるものであった。というのも、

全教員の数自体が大きく減少しているからである（九七〇八人→三一八一人）[71]。また、これにあわせて、識字班の整理も行われた。以上の結果から、識字運動委員会は、識字運動の重点を量（大量の群衆に、速成識字法を利用して「突撃的」に読み書きを教えるという方針）から質（やる気のある学生に着実に読み書きを教える）へ転換させたことが見て取れる。かかる流れはその後も受け継がれ、例えば一九五四年には、出席情況が芳しくない識字班の学生の処理方法（退学を含む）などを定めた「天津市各区識字学校学員考勤、考試及学員学籍処理辦法」が出されている。

このように、一九五〇年以降（特に一九五二年六月以降）質よりも量を追い求める傾向があった天津の識字教育は、ここに及んで量から質へと、大きく方針を転換するに至った。そのため、識字班に通う学生数は一九五二年八月の三二万七七三四人を頂点にその後みるみる減っていき、一九五三年六月にはピーク時の半分以下の一五万八二三七人に[72]、そして一九五四年九月には四万七〇〇〇人余まで落ち込んだのである[73]。

（二）宣伝隊の整理

情況を打開するため、一九五二年から各区の文化館は宣伝隊の整理に着手した。まず、いくつかの区で宣伝員の訓練が行われ、積極分子の能力の向上と、問題のある人物のふるい落としが行われた。また、指導体制の混乱という問題に対しては中国共産党天津市委員会宣伝部が動き、一〇月、各機関・団体に所属している宣伝隊に対し文化館の指導に従うべしとの方針が発せられた（各文化館は区委宣伝部の指導を受ける）[74]。ただし、最後に残った宣伝員の多忙化という問題については、結局解決できなかった。なぜなら、その直後、天津の各区では基層組織の改組が行われたからである。これにより、宣伝員の多くが政府の出先である街公所（後の街道辦事処）の長や文教委員などの職務に就くようになり、さらに多忙になった。また、民衆自治組織である居民委員会でも街公所の指導のもとで独自に宣伝活動を行うようになり、もともと文化館の宣伝員だった人々がそれに参加した。そのため、同じ作業を二つの系統の部署が管轄することになり、結局宣伝員

の多くは身近な居民委員会の指示だけを受けるようになった。つまり、文化館は宣伝隊の指導ができなくなったのである。[76]

同様のことはどうやら国内の他の地域でも起こっていたようで、折しも中央人民政府文化部より「文化館、站工作の整頓と強化に関する指示」が出された。そこでは、「文化館は本来群衆文化活動を展開する事業機構であるべきなのに、実際は本来の業務範囲を超えて活動している文化館が少なくない」との指摘がなされ、文化館が本来の職務に戻ることを指示し、あわせて文化館活動の規模の縮小が提起されている。[76] この影響はまもなく天津にも及び、結局文化館と宣伝隊との関係は解消されることになった。そして、以降文化館は文学・文芸・演芸の振興など群衆文化関係の職務に専心していくことになったのである。[77]

おわりに

以上、天津での例をもとに、中華人民共和国初期における「社会教育」の動向、およびそれと大衆運動との関係について見てきた。これにより、「解放」後天津における「社会教育」の規模が従来に比べて未曾有の拡大を示したこと、一九五〇年後半から始まった抗美援朝運動や反鎮運動でもそうした「社会教育」が、特に街区での宣伝や動員で大いに力を発揮したこと、さらに群衆の積極分子をリクルートする上でも「社会教育」の各活動が役に立ったこと、ただし、群衆に教育や宣伝を任せた分、担当者の教育能力や兼職に起因する様々な問題が発生し、最終的に人員の整理が行われたこと、などが明らかになった。

「はじめに」でも述べたように、清末以来中国の各政府は、民衆知識の向上をめざすべく、教育の普及に取り組んできた。もちろんその背景には、教育を通して「国民」を形成し、それによって国家を富強化させるという大きな目標があっ

た。その点から見れば、本稿で明らかになったような人民共和国初期天津の教育・宣伝のあり方は、如上の理想をかなりの程度満足させるものであったと言うことができる。注目すべきは、この時期になると、それに教育・宣伝を受けるべき人々（学生、労働者、失業青年、主婦など）までもが教員・宣伝員として参加するようになったことである。彼ら、彼女らのなかには純粋に識字教育の必要性や国家建設に対する信念から活動に参加した者もいたであろうが、当然のことながら、社会的上昇のためや、迫害を免れるために教員などになった者もいるだろう。そうであったとしても、彼らが積極的に国家の主導する教育・宣伝活動に参加し、さらにはそれを通じて末端の政治や行政に参入するようになったこと（さらに言えば、「教育」の名の下に国家の政策に合わない者たちを攻撃さえするようになったこと）は、それまでにない大きな変化であったと言える。反面、群衆の教育・宣伝活動への参加は、現場に多大な混乱をもたらした。一部で教育や宣伝の効果が上がらなかったり、内容が曲解されたりした。しかも、それに対して政府や関係機関は十分な統制を行うことができなかった。

このように見ると、朝鮮戦争による危機や各大衆運動の嵐の中で天津に形成されたこの新しい教育・宣伝の形は、ある意味で諸刃の剣のように、ジレンマに満ちたものであった。そのため、本論で述べたように、一九五三年以降政府は従来のような形（群衆教員を抑制、量より質を重視）に戻そうとした。しかし、どうやら大躍進運動期になると群衆が再び教育・宣伝の場で活躍するようになるようである。[78] あるいは、一九五〇年代初頭に現れたこの新しい教育・宣伝の形は、更新を重ねながら大衆運動とともにその後も繰り返し登場したのかもしれない。そうであるならば、それが社会にどのような影響を与えたのか、文化大革命期をも射程に入れながら検討する必要があろう。また、今回は天津の事例のみについて考察したが、他の地域の動向についても明らかにする必要があると考える。

（1）日本語にも社会教育（shakai kyoiku）という用語があるが、中国の社会教育（shehui jiaoyu）とはニュアンスが異なるため、中国の社会教育について言及する際は「社会教育」と表記する。

（2）拙稿「近代天津における『社会教育』の変容過程」慶應義塾大学大学院文学研究科博士学位請求論文（平成一九年度）、二〇〇八年（未刊）。同「平民教育と天津社会―中華民国北京政府期における「社会教育」の地域性―」山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社、二〇一一年。

（3）こうした研究のなかで、人民共和国初期の（人民）文化館について検討した以下の研究は注目に値する。横山宏「中華人民共和国における人民文化館―その沿革を中心とした若干の考察―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』三五輯（哲学、史学編）、一九八九年。ただ、文化館の活動と大衆運動との関係については、考察が十分でない。なお、近代中国の「社会教育」に関する研究動向については、拙稿「近代中国『社会教育』史研究の現状と課題」『中央大学アジア史研究』三二号、二〇〇八年に詳しい。

（4）拙稿「宣講所と文化館のあいだ―近代天津における「社会教育」と中国革命―」高橋伸夫編著『救国、動員、秩序―変革期中国の政治と社会―』慶應義塾大学出版会、二〇一〇年。

（5）泉谷陽子『中国建国初期の政治と経済―大衆運動と社会主義体制―』御茶の水書房、二〇〇七年。金野純『中国社会と大衆動員―毛沢東時代の政治権力と民衆―』御茶の水書房、二〇〇八年。岩間一弘『上海大衆の誕生と変容―近代新中間層の消費・動員・イベント―』東京大学出版会、二〇一二年。日本上海史研究会編『建国前後の上海』研文出版、二〇〇九年。

（6）他方、農村における社会統合と「宣伝教育」（「中国共産党が自らの政策を促進するために、大衆に情報を与えて働きかける様々な手段」のこと）との関係については河野正氏が一九五〇年代の河北省を事例に論じている。本稿の問題意識にも近い内容で興味深いが、当然のことながら都市と農村とでは状況がかなり異なる（河野正「中華人民共和国初期、河北省における宣伝教育と農村社会―成人教育・機関紙を中心に―」『東洋学報』第九二巻第三号、二〇一〇年）。

(7) Kenneth Liberthal, *Revolution and Tradition in Tientsin, 1949-1952*, Stanford: Stanford University Press, 1980.

(8) 教育局では全職員一一六名中、留用されたのは五六名であった。その他は、他部署での仕事を紹介された者が一五名、解雇された者が四五名であった（天津市教育局『教育志』編修辦公室編『天津教育大事記』下（一九四九―一九八五）、天津：天津市地方史編修委員会総編纂室、一九八七年、四頁。

(9) 「天津市教育局接収工作報告」（節録）（一九四九年三月九日）中共天津市委党史資料徴収委員会・天津市檔案館編『天津接管史録』北京：中共党史出版社、一九九一年、三五四頁。

(10) 「中国共産党接管天津工作大事記要」前掲『天津接管史録』八四〇頁。前掲『天津教育大事記』下、二頁。

(11) 前掲『天津教育大事記』、八～一〇頁。

(12) 拙稿「一九二〇年代後半～四〇年代天津における義務教育の進展とその背景」『東洋史研究』第六九巻第四号、二〇一一年。

(13) 張国藩「天津市一九五〇年教育工作的基本総結」『天津教育』第一〇期、一九五一年、五頁。

(14) 毛沢東『論聯合政府』「第八　文化、教育、知識分子問題」（竹内実監修、毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』第九巻、延安期Ⅴ（一九四三・一～一九四五・一二）、北望社、一九七一年、二五四頁所収）。

(15) 陸定一「新中国的教育和文化」『天津教育』創刊号、一九五〇年、六頁。

(16) 「天津市教育局関於一年来天津社会教育工作概況」（一九五〇年三月）前掲『天津接管史録』八〇〇～八〇二頁。

(17) 文化館主催の余暇活動には一九四九年から一九五八年までの各年において、最小で三〇人（一九四九年）、最大で二〇二万二六四一人（一九五七年）が参加していた（天津市文化局檔案〔人民共和国時期檔案、以下文化局檔と略す〕、X一九九―一―八五五、天津市文化局計財処「文化局関於図書館、博物館歴年蔵品報告表及文化館十年資料」所収、「天津市文化館工作十年資料」〔一九六一年五月三一日〕）。なお、天津の人口については天津市地方志編修委員会編『天津簡志』天津：天津人民出版社、一九九一年、一一七四頁の表を参照した。

(18) 天津市教育局檔案（民国時期檔案）、J一一〇―三―一一九―六、天津市教育局「本局推行失学民衆識字教育報告書」（一九四六年一一月）。

(19) 寒江「第八文化館的掃盲工作―他們怎様在三個月内動員了一千四百余人入学？―」『天津教育』第四・五号、一九五〇年、三八頁。

(20) 朱慧生「群衆識字班教学経験介紹」『天津教育』第六号、一九五〇年、二七頁。

(21) 君里「一九五〇年天津教育工作者的業績」『天津教育』第八期、一九五一年、一五頁。

(22) 前掲「天津市一九五〇年教育工作的基本総結」、五頁。

(23) 「本市群衆識字班学員達三万余人」『天津教育』第一三期、一九五一年、一九頁。

(24) 天津市識字運動委員会檔案（人民共和国時期檔案、以下識字委檔と略称）、X一九八―一―三九〇―二、天津市教育局職教科「市政府、市教育局関於一九五一年社会教育掃盲識字運動的請示通知」所収、天津市教育局「天津市群衆識字教育一九五一年上半期工作総結」（一九五一年）。

(25) 前掲「一九五〇年天津教育工作者的業績」、一五頁。

(26) 前掲「本市群衆識字班学員達三万余人」、一九頁。

(27) 王鋭民「識字教育的開展和應注意的幾個問題」『天津教育』第二号、一九五〇年、九頁。識字委檔、X一九八―一―三二二―一、天津市教育局市識字委「市識字委関於成立群衆教師業余学校的通知」所収、市識字運動委員会「一九五一年天津市群衆識字教育実施方法」（一九五〇年一一月二五日）。

(28) 前掲「天津市群衆識字教育一九五一年上半期工作総結」。同史料によると資金集めの方法は次のようであった。(1) 各区の工商業の資本家に対し自主的に寄付をするよう働きかける、(2) 衆力を合わせるか節約するかして供出する、(3) 生産・商業組織を立ち上げ、その経費をやりくりして供出する、(4) 識字班の学生が自主的に寄付する。そのうちの (1) において、資本家に対する強権的な働きかけ

があったかどうかは現時点では分からない。

(29) 教育局工農教育科「天津市工人業余教育初歩総結」『天津教育』第四、五号、一九五〇年、一〇頁。ただし、一九五一年の調査では、天津で働く職工五二万人のうち三七万四〇〇〇人が文盲、半文盲とされている。人口増加により文盲数も増えたものと考えられる（識字委檔、X一九八―一―四四五―一、天津市教育局識字運動委員会「市識字運動委員会的組織条例、工作計画」所収、同「天津市各級識字運動委員会組織条例」）。

(30) 前掲「天津市工人業余教育初歩総結」、一〇頁。

(31) 「天津市職工業余教育委員会組織条例」『天津教育』第四・五号、一九五〇年、八六頁。

(32) 前掲「天津市工人業余教育初歩総結」、一〇～一一頁。

(33) 一九五一年に政務院より頒布された新学制により、業余学校は識字学校に組織替えされた。その後一九五二年七月に再び分割、その一部が識字運動委員会管轄の識字班になったものと思われる（識字委檔、X一九八―一―三二二―二、市識字運動委員会「識字教育一九五一年下半年工作計画」（一九五一年）所収、同「同名」。X一九八―一―四九三―一、天津市教育局財計科「市教育局関於初等業余学校与識字学校合併後経費開支的規定」所収、市教育局「為請示関於各区初等業余学校与識字学校合併後、経費如何開支由」。

(34) 識字委檔、X一九八―一―四八一―一、天津市教育局財計科「市教育局一九五三年下半年教育工作統計簡報」所収、市教育局「天津市一九五三年下半年教育統計簡報」（一九五三年一二月）。

(35) 大原信一『中国の識字運動』東方書店、一九九七年、一八二～一八五頁。呉遵民『現代中国の生涯教育』明石書店、二〇〇七年、一一八～一二一頁。

(36) 前掲『天津教育大事記』下、三九～四〇頁。

(37) 前掲「天津市各級識字運動委員会組織条例」。

(38) 識字委檔、X一九八―一―四一八―九、天津市教育局市掃盲委「市識字運動委員会八―一二月分及一九五三年一季度工作小結」所収、市教育局「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」(一九五三年一月)。

(39) ただし一部では、学生を集めるために強制的な手段が採られることがあった。また、入学した学生の中にも「速成識字法」を「苦労なく、すぐに読み書きができるようになること」と勘違いする者がいた。そのようにして入ってきた学生の多くは、しばらくすると勉学意欲を失ってしまい、退学に至ったようである(前掲「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」)。

(40) 泉谷陽子前掲書、一八～二五頁。

(41) 天津市地方志編修委員会編著(郭鳳岐総編集)『天津通志　大事記』天津：天津社会科学院出版社、一九九四年。なお、天津における抗美援朝運動・反鎮運動の具体的な動向については、以下に詳しい。Liberthal, *op. cit.*, pp.102-124.

(42) 「天津市一九五一年教育工作計画綱要」『天津教育』第一〇期、一九五一年、七頁。

(43) みな朝鮮戦争関連のものであろうが、詳しい内容については不明。

(44) 崔鳳舜「我在識字班中進行抗美援朝愛国主義教育的一点経験」『天津教育』第一二期、一九五一年、四五頁。

(45) 朱慧生「在抗美援朝高潮中的工農群衆識字班」『天津教育』第一二期、一九五一年、二二頁。

(46) 劉少夫「職工業余学校是時事宣伝的重要陣地」『天津教育』第一二期、一九五一年、二一頁。

(47) 前掲「天津市群衆識字教育一九五一年上半期工作総結」など。

(48) 文化局檔、X一九九―一―一四五―九、天津市文化局社会文化処「本処関於社会文化工作的総結和計画及文化館的工作意見、報名」所収、文化局「天津市文化館一九五三年工作総結」。

(49) 化岡「第四文化館識字班的宣伝工作」『天津教育』一三期、一九五一年、一一頁。

(50) 前掲「第四文化館識字班的宣伝工作」、一一頁。

(51) 前掲「在抗美援朝高潮中的工農群衆識字班」、二二頁。

(52) 前掲「天津市文化館一九五三年工作総結」。本文では主に一九五一年の事例を中心に紹介したが、一九五二年も同様に識字班による宣伝が展開されていた。例えば、第一一区の五馬路派出所では識字班の学生だけで三四〇件の検挙をしている（前掲「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」）。

(53) 前掲「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」。

(54) 例えば小学生による宣伝活動の例として、以下などがある。劉寄生「六区三小黒牛城宣伝記」、「七区中心孩子們的宣伝工作」、「十区中心小宣伝員們的工作」（ともに『天津教育』第一二期、一九五一年）。

(55) 前掲「職工業余学校是時事宣伝的重要陣地」、二一頁。

(56) リバソールは、三反運動および五反運動の意義を強調するあまり、それ以前から行われていた抗美援朝運動および反鎮運動が天津社会に与えた影響についてあまり評価していない。また、文化館や識字班、そして業余学校が上記大衆運動で果たした意味についても十分に検討していない。しかし、本稿で明らかにされたように、特に官庁や企業以外の場での宣伝・動員において文化館・識字班・業余学校が果たした役割は決して少なくなかったと言える（Liberthal, *op. cit.*, pp.97-179）。

(57) 業余学校の教員については、史料上の問題があり十分に論じることができない。一九五一年前半までの情況に限って言えば、問題となっていたのは、主に教員の健康および指導方法についてであった。その背景には、業余学校の教育を各小中学校の教員が兼任していたという事実がある。教員のなかには、多忙のために体調を崩す者もいた。また、年齢的な要因もあるが、一般的に業余学校の学生は、正規学校に通う学生に比べると能力の点で劣っていたため、彼らに対する指導に困難を感じた教員も多かったようである（前掲「天津市工人業余教育初歩総結」、一三頁）。教員の多忙化への対応として、業余学校の授業を専門に担当する教員がその後新たに採用されたが、彼らの多くは知識や経験が不足しており、さらなる問題を引き起こしたようである（高非「如何克服業校学員流動問題」『天津教育』第八

期、一九五一年、四五～四六頁）。

（58）前掲『中国の識字運動』、一八五～一八七頁。

（59）前掲「天津市群衆識字教育一九五一年上半期工作総結」。

（60）前掲「識字教育一九五一年下半年工作計画」。

（61）前掲「一九五二年天津市掃除文盲工作報告」。

（62）識字委檔、X一九八―一―五二三―二一、天津市教育局掃盲委「市掃盲委、市識字運動委員会関於掃盲工作報告、総結」所収、市政府掃盲工作委員会「為発去四区半年工作総結供参考由」（一九五三年八月六日）。

（63）識字委檔、X一九八―一―四一八―八、前掲「市識字運動委員会八―一二月分及一九五三年一季度工作小結」所収、市識字委「天津市識字運動十一月分小結」（一九五三年一月一六日）。

（64）識字委檔、X一九八―一―四二五―四、天津市教育局市掃盲委「市識字運動委、婦聯、団市委等関於推動掃文工作的調査報告」所収、掃盲委棉三調査組「天津市第三区于廠大街識字学校典型調査」（一九五三年一月九日）。

（65）文化局檔、X一九九―一―一四一―一二、文化局「本局和文化館関於建立街道宣伝隊的調査報告等有関文件」所収、文化局「九区文化館関於街道群衆宣伝員第一期学習班計画（草稿）」。同様の指摘はやはり第九区の情況について述べた文化局「文化館対発展整頓和統一領導全区街道群衆宣伝組織的意見」（文化局檔、X一九九―一―一四一―一四、前掲「本局和文化館関於建立街道宣伝隊的調査報告等有関文件」所収）にも見える。なお、天津における三反、五反運動は、一九五一年一二月から一九五二年五月にかけて展開された（Liberthal, *op. cit.*, p.161）。

（66）かつては教育局が文化館を管轄していたが、一九五〇年八月以降、行政上は区政府が管轄するようになった（教育局辦公室編「天津市一九五〇年教育工作大事記」『天津教育』第八期、一九五一年、五六頁）。ただし、業務上では教育局と文化局の指導も受けていた（X

一九八―一―三九〇―四、市政府「為発布『関於文化館問題的決定』希即遵辦由」（一九五一年四月二五日）。

(67) Liberthal, *op. cit.*, p.103. 市政府委「関於全市文化館的情況報告及今後意見」（一九五一年四月）。

(68) 前掲「文化館対整頓発展和統一領導全区街道群衆宣伝組織的意見」。

(69) 文化局檔、X一九九―一―一四一―一八、前掲「本局和文化館関於建立街道宣伝隊的調査報告等有関文件」所収、文化局「関於整頓各区群衆宣伝組織、建立宣伝隊工作的進行状況和幾個収容問題（提供宣伝会議討論）」（一九五二年）。

(70) 前掲「天津市識字運動十一月分小結」。

(71) 前掲「市教育局一九五三年下半年教育工作統計簡報」。

(72) 同上。

(73) 前掲「為請示関於各区初等業余学校與識字学校合併後、経費如何開支由」。

(74) 前掲「関於整頓各区群衆宣伝組織、建立宣伝隊工作的進行状況和幾個収容問題（提供宣伝会議討論）」。

(75) 文化局檔、X一九九―一―一四一―一、天津市文化局社会文化処「本局和文化館、関於建立街道宣伝隊的調査、報告等関係文献」所収、文化局「天津市八区群衆宣伝組織調査報告與今後工作改進意見」（一九五三年五月二八日）。

(76) 文化局檔、X一九九―一―一四七―一一、文化局「関於調整行政区画方案及文化館站調整方案和結果」所収、「関於整頓和加強文化館、站工作的指示（草案）」（一九五三年一二月二一日）。

(77) 前掲「天津市文化館一九五三年工作総結」。

(78) 天津市地方志編修委員会編著（郭鳳岐主編）『天津通志　基礎教育志』天津：天津社会科学院出版社、一九九九年、六〇六～六〇七頁。文化局檔、X一九九―一―三〇二―一、天津市文化局辦公室「各局属単位関於文化工作的総結」所収、市文化局「天津文化工作専題材料」（一九五九年一月）。

（付記）本稿は平成二二～二五年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「近現代中国における伝統芸能の変容と地域社会」（課題番号：二二三二〇〇七〇、研究代表者　氷上正）による成果の一部である。

静岡大学に赴任して以来、重近先生にはお世話になりっぱなしであった。大学の仕事にも慣れてきて、少しずつ先生のお手伝いができればと思っていたが、その矢先に突然旅立たれてしまった。まさか自分がこんなに早く静岡大学の東洋史を支える立場になるとは思わなかった。今、その重みをひしひしと感じている。重近先生、これまで本当にご苦労さまでした。どうか安らかにお眠り下さい。